〒９０５－００１１　沖縄県名護市宮里４４７－２０　丸平第２アパート１０２号　TEL０９８－０５４－８５５５　Eメール　nago.kyodoc@bird.ocn.ne.jp
郵便振込口座番号０１７１０－０－１６６２２１　加入者名・新基地建設反対名護共同センター　２０２４・３・２２（金）　４４９号

新基地建設反対名護共同センター　ニュース

最高裁が下した「県の上告不受理」は言語同断！！

知事支え諦めない！

名護市辺野古の新基地建設に抗議する県民大行動（主催・オール沖縄会議）が、三月二日（土）に、辺野古の米軍キャンプシュワブゲート前で開かれました。

国が玉城デニー知事から権限を奪い、新基地の設計変更を承認した「代執行」をめぐる訴訟で、県の上告を不受理とした最高裁の不当判決極まる決定の翌日とあって千人余が参加しました。

稲嶺進共同代表は、「国の主張の丸のみで、我々の訴えを受付もしないとはどういうことか。我々は心を一つにして、新基地建設を認めないということを確認したい」とあいさつしました。

法解釈の勝手な変更や、本来国民を救済するはずの行政不服審査制度を、防衛省が私人になりすまして利用するなど、異常な手法をとった国に加え、異例の代執行訴訟にもかかわらず県の主張を顧みなかった司法も、「沖縄の不条理を置き去りにした」と参加者は怒り心頭です。

去った大戦で失われた命「命どぅ宝」こそ正義であり、今の世界情勢にも通じる言葉であります。

与那国　「基地」開設から８年・進む軍事要塞化に島が壊れる

宮良 純一郎

2016 年3月、与那国島に沿岸監視部隊が開設されてから8年が経った。

「安保関連3文書」を節目にミサイル基地へ着々と進み、軍事要塞化が加速している。それに呼応するかのように町当局は「与那国町危機事象対策基金条例」を制定し、国に対して避難シェルターの設置を求める（意見書を議会で可決）など、国策推進へ追随する行政の対応は、「有事」がくるかの如く不安を煽りたて、緊張を高めている。

前町長は「沿岸監視隊の誘致はしたがミサイル配備は聞いていない。穏やかな生活が脅かされそうになっている」と告発し、ある島民は「自治体が解体していく」との危機を表している。かつて国際交流・友好親善であった国境線は、今や戦火の導火線へと変質してしまった。

今、島民の人権・暮らしが脅かされ、島の自然・文化財が壊れようとしているのが「土地規制法」であり、「特定重要拠点空港・港湾整備」による軍事的行為である。前者では、4カ所がその注視区域に指定されており、島の大半を占めている。後者では、その拠点として計画が浮上しているのがカタブル浜・樽舞湿地（写真）を掘削しての新たな港湾建設である。その規模は地下 40m、巾 200m～300m、長さ内陸（樽舞湿地）へ 1.2 ㎞と言われ、その先にミサイル配備の予定地がある。

ミサイル配備予定地は「村遺跡」であ埋蔵文化財であるが、防衛省は配備にかかる関係費用を 23 年度予算に計上している。工事にかかる桁外れの掘削量、希少種動植物が生息する優れた樽舞湿原の環境ばかりでなく、島全体の生態系、環境・暮らしに与える影響は計り知れない。

早坂義郎さんの一周忌に寄せて

早坂義郎さんへ感謝の気持ちをこめて

辺野古障がい者の集い実行委員　渡嘉敷綏秀

早坂義郎さんが亡くなられ早一年になります。

私が早坂さんに初めてお会いしたのは「新基地建設反対名護共同センター」を訪れた時ではなかったかと記憶しています。もう七、八年前の事です。

以後、早坂さんは、視覚障がいの私を見かけると、いつでもどこからでも「早坂です。」と元気いっぱいの声をかけてくださり、力強い握手を交わしたことがついこの間のような気がします。

また「名護市辺野古のキャンプシュワブ前テント村」で、一二月三日から九日までの「障がい者週間」にちなんで、「辺野古障がい者の集い」を開催することになりました。実行委員会を立ち上げるための準備会の段階から、早坂さんも実行委員として参加され、集いの企画、運営にあたりました。

早坂さんは、チラシはもちろん、インターネットでの集いに参加を呼びかけるメールを配信され、県外からの障がい当事者・関係者が、グループで個人で自主参加された方々を含め、県内外から集いました。「辺野古障がい者の集い」は決して大きな規模の集いではありませんが、全国規模の集いになりました。

毎年、秋口になると「今年の集いは」の問い合わせの電話やメールも増えてきました。これもひとえに早坂さんのお力添えがあったからこその賜物です。

この間の取り組みを通じて、私は人生の先輩として、また、活動家の一人として早坂さんからたくさんの事を学ばせていただいたように思います。　早坂さんありがとうございました。

早坂氏追悼一周年のことば

小泉 親司

早いもので一周忌を迎えました。昨年一月、「女房に泣かれてしまったよ」と言って病状を報告してくれた衝撃をいまだに忘れることができません。その正月明けに、お互い後期高齢者で「あと少し頑張ろうね」と誓い合った直後の知らせでした。

早坂さんと私は、一九七〇年代はじめから千葉で一緒に活動した仲間でした。七二年、沖縄の祖国復帰を実現したものの、日米沖縄協定で核基地が残され、協定反対のたたかいに奔走した頃でした。そして約半世紀後の二〇一五年、安保中実委事務局長の時、「沖縄を見捨てるわけにはいかないよな」といって沖縄へ行くことを決意してくれました。これは早坂氏みずからの選択でした。みずから沖縄県民のたたかいに命を捧げたものでした。その決意と行動は、今日の活動にしっかり受け継がれています。

早坂さん、あらためて、ありがとうございました。